

氏名(本籍)	笹尾典代(東京都)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1706号		
学位授与年月日	平成13年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	哲学・思想研究科		
学位論文題目	暦と時間の宗教学的的研究 —メソアメリカにおける「暦」の宇宙論的構造と存在論—		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	荒木美智雄
副査	筑波大学教授	博士(文学)	棚次正和
副査	筑波大学講師	博士(文学)	木村勝彦
副査	神戸大学教授	経済学博士	細野昭雄

### 論文の内容の要旨

本論文は、古典期マヤを中心に先スペイン期のメソアメリカ文化圏において独自の発達を遂げた「暦(カレンダー)」の宗教学的意味を探究する解釈学的試みである。まず、「序」において著者が考察しているように、古代メソアメリカ文明における顕著な文化的特徴の一つが、その精緻な天文学的知識と暦体系であり、人々の類い稀なる時間への執着である。本論文の暦の宗教学的意味の解釈の試みは、それ自体においてこの暦の解釈をとおして、メソアメリカの人々の知識と思考、神話、信仰、魂の伝承と、その「根源的な」人間の宗教的存在様態の再発見・再創造の営みであると著者は考えている。

本論文は比較的短い「序」に加えて、そこから展開する全5章から構成されている。まず、「第一章 問題と方法論的省察」では、本論文が立脚する宗教学的の課題と方法論的視点についての理論的考察を行っている。とくに、宗教学における現象学と解釈学の伝統を再把握しながら、ミルチア・エリアーデの独自の解釈学的プログラムである「新しいヒューマニズム」の視点とその具体的方法である「宗教形態学」の重要性を検討し、その形態学を支えている「アーケイズム」「アルケー」「アルケ・タイプ」、すなわち「祖型・根源型」は、歴史と構造、個別と普遍の間の方法論的緊張を創造的に総合すると同時に歴史の中でアルケーを生きる根源的な人間を理解するのに欠かせない概念であることを示している。この解釈学的概念の検討を通じて、メソアメリカの宗教研究に欠落していた宗教学的視点の必然性を明らかにするとともに、逆に、これまで宗教学の研究において十分に扱われて来なかった「暦」という研究対象が優れて第一級の宗教学的資料となりうることを示している。「暦」はここでは、現在規範の *illo tempore* (かのはじめの時) における開示、宇宙の諸力を媒介する宗教的象徴である。本論文は、かかるヒエロファニーとしての宗教的象徴の解釈の企てであり、その解釈が本論文の「暦」研究の意義である。

「第二章 メソアメリカ宗教文化と暦体系」では、メソアメリカにおける「暦」と創世神話との関連を明らかにすることによって、その暦のコスモロジカルな位相を考察するとともに、暦が有した存在論的意味を論じている。とりわけ、メキシコ中央部において高度に体系化された「5つの太陽」と呼ばれる創世神話の過程に、暦が組み込まれていることに注目して、メソアメリカでは、暦が世界の成立と存在の原理に関わるものであるということを示した。また、そのコスモロジーに特徴的な二元論的考察に着目しつつ、二つの相補的極性の対立、すなわち時間と非時間(永遠)の相補的關係によって、その基本的な宇宙論と時間概念を考察している。

「第三章 暦の宇宙論的構造と存在論」では、チュマイルの『チラム・バラムの予言書』に含まれる創世神話に、

マヤの宗教暦であるツォルキン暦(260日暦)の起源を探り、さらに、古典期マヤの暦体系の中で重要視されていた「819日周期」が、マヤ暦のあらゆるサイクルが一致して世界創世の始源に回帰する周期であることを解明することによって、マヤの宇宙観・歴史観の中では、暦に従って、神々に運ばれ顕現する具体的な力(クラトファニー)としての時間が世界の本質と考えられていたということ、さらに、暦の遵守それ自体が、世界を周期的に創造する神々の「足跡」を再現する「儀礼」であることを明らかにしている。すでに第二章で示したように、「かのはじめの時」illo temporeにおける存在の現れとして、暦が世界の成立と存在の規範である所以が明らかになっている。さらに、時の始源への周期的回帰によって、世界の超歴史的な普遍的層へと開かれる人間の神話的存在様態の存在論的有効性を論じ、そこに、メソアメリカにおける「予言」の重要な意味が明らかにされている。

さらに、「第四章 暦と〈聖なる歴史〉」では、メソアメリカ文化圏では、唯一、「記年法」の一種である「長期計算法」を発達させ、膨大な「年代期」としての「歴史」を記録した古典期マヤの歴史観、歴史意識の様式を具体的にパレンケ王朝の神聖王権の「歴史」の記録を解説をとおして考察している。すなわち、アルカイックな「歴史」が、つねに神話的存在から連なる王権の系譜という形式をとることに注目し、これまで、直線的時間概念による、いわゆる「記年法」と考えられてきたマヤの「長期計算法」の目的が、歴史的現在が紀元から数えて「何年」であるかを知ることではなく、実際には、「はじめの時」、神話的起源の時の出来事の周期的反復の積算を知ることであったということが解明された。パレンケ王朝の「系譜」をはじめ、神話の時間形式はつねに「系譜」(ジニアロジー)という表現形式をとる。古代的心性においてアルカイックな歴史意識とは、祖先の根源的・本質的存在、すなわちアルケーが、時間の歴史的生成の流れの中で存在し続ける「象徴的世界」についての直観形式、すなわち「神話」の時間経過に他ならない。そこでは、「暦」が「同じ日付けが同じ出来事をもたらす」ことの確認と予見を可能にし、同時に周期の「はじめの時」(起源)が神話的時間と歴史的時間をつなぎ合わせ、「神話=歴史」という歴史観が成立していたということが解明されている。

「第五章 メシーカの太陽崇拝:メシーカの〈聖なる歴史〉と宇宙」では、人間の神話的・象徴的存在様態が「歴史」の合理化の侵食を受けること存在論的問題を、アステカ帝国において特異に展開した太陽崇拝の宗教形態を取り上げ、その歴史のアイロニーを主題化している。四章までの議論において、暦に徹底して従順に生きるメソアメリカの人々の神話的宗教的存在様態においては、ひたすら変化し流動する歴史の「俗なる」継続的時間を拒否しようとする存在論的安定への希求が見られたが、ここでは、同じメソアメリカにあり、マヤと近接するメシーカにおいて神話的歴史意識が帝国の歴史的崩壊を自ら招いたメシーカの神話的時間意識と、暦が開示する宇宙の範型に従いながら、歴史の悲劇を帰結したことの意味を解釈している。

## 審査の結果の要旨

本論文が一貫して明らかにしようとしていることは、ヨーロッパから隔絶したアメリカ大陸であったが故に、独自の発達を遂げた古代マヤの精緻なアルカイックな「暦」があらわにする宗教学的意味の探究であり、それは、考古天文学や人類学などの社会科学の分析のレベルを大きく超え出て統合的宗教学的立場からする一つの全体的解釈の試みである。「暦」は世界宇宙が自らを開示する象徴言語であり、かの「はじめの時」にあらわになる「聖なるものの顕われ」である。単なる客観的時間を超えた神話的宗教的時間である。古典期マヤの暦の複雑な体系に分け入って、その存在論的構造全体を神話的象徴的意味のレベルで解説し、極めて鮮やかにしかも深い解釈を施してわれわれに理解可能なものとしている。本論文は、暦が開示する、根源的で大きな豊饒な世界を学問的に提示しており、同時に、現代世界の世俗的時間にしばられている人間に時間の意味について考えさせ、暦の復権、時間の全体性の回復を示唆する意義深い論文になっている。さらに、「終章」においては、全体が反省的に再把握、再確認されている。

しかし、問題点がないわけではない。まず、著者自身が「終章」で反省しているように、暦のアルカイックな

意味の解明のために、他のアルカイックな宗教伝統の暦とそれらの暦を生きる人々の宗教的存在様態との比較がなされていない。メソアメリカ暦の、より一層根源的な意味の解明の為に、ぜひこの比較は大きく達成されることが期待される。暦の体系を象徴的に解釈することには成功しているとして、暦の象徴主義には、しかし、不透明で深い部分があり、取り扱われずに残されているのではないか。言い換えれば、あらわにされている部分に加えて、隠ぺいされている部分をも取り扱うことによって大きく膨らむ解釈が可能となるのではないかという問題である。また、他のアルカイックな宗教によく見られるように、日や月の数は単に暦の体系の中で意味をもっただけではなく、その他にも数そのものに宗教的象徴的意味があったという問題である。さらには、古典期のマヤの暦あるいはメソアメリカ全体の暦は、植民地支配期以後に、あるいは、現在、マヤやメソアメリカの人々にどのように受け止められているか、などである。

以上のような問題点があるとはいえ、本論文は、古典期マヤの暦の宗教学的意味についてのおそらく世界で最初の宗教学的解釈学の業績である。その豊饒で、根源的な意味の体系を解明しえたことの意義は高く評価される。学界に寄与すること多大であり、学位論文として十分に価値あるものと認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。